

第6回 NUS & NUAS 読書コメント大賞 (2022) ・ 一般投票

一番「いいね!」と思ったコメントを教えてください。
投票フォーム: <https://forms.gle/pe6GcNspJRabGX829>

	書名	著者名	コメント
[1]	人間失格	太宰治	<p>これは”誰かに裏切られた”人のための物語だ、と思った。現代人からすれば一見、ありえない世界なのかもしれない。きっとそれは嘘に慣れてしまったからだ。人間の皮をかぶった悪意が、いや悪魔が人間ごっこをしている世界。彼が見ている世界はそんな感じなのだ。人は嘘をつく。嘘をついて大人になる。では、嘘は悪魔か？</p> <p>読めば読むほど疑心暗鬼になる。しかし、疑心暗鬼に陥った人間にとっても、この本はそれを肯定するものになるだろう。現実世界のどこにも味方がいないなら、この本だけが味方になるだろう。彼は己の欲望に嘘をつかない事で人間であろうとしたのか。正直でいる事が人間なのか。結局は嘘をつき、彼は最後に死ぬ事で悪魔から人間になったのか。いや違う。しかしどこに答えがあるのだろう。</p> <p>この本にあるのは絶望とその伏線だけだ。しかし、この本を読む誰かにとってこれは希望である。</p>
[2]	とんでもない死に方の科学	C・キャンディー、P・ドハティー著；梶山あゆみ訳	<p>貴方は「死」に恐怖を感じますか？</p> <p>ここでは敢えて断言しよう、貴方は死ぬのが怖い。 どう取り繕っても私たちは死に対してシリアスだ。</p> <p>包丁、階段、滑りやすい床……</p> <p>私たちの生活は死臭に満ちている。 「可能性」に塗れた私たちは生存を図る限り、この死臭からは逃れられない……</p> <p>しかし、本書はそんな生活にひと匙のシニカルさを与えてくれる。 概要は書名から察し得るだろう。さまざまな「とんでもない死に方」を科学的な視点でユーモアを加えつつ解説してくれる。</p> <p>この面白い点はスケールの極端さだ。 包丁、階段、滑りやすい床……これが普段。 そこに「もしもブラックホールに飛び込んだら」「バナナの皮で滑って死んだら」といった「可能性」を加えてみよう。途端に滑稽さを帯びる。</p> <p>私が当書に魅力を感じた点はこのにある。 逃れられないシリアスな人生にせめてものユーモアを。死臭に慣れたフリして生きるより、よほどいい。</p>
[3]	舟を編む	三浦しをん	<p>言葉というものはひとときも形を留めてはくれない。毎日新しい言葉が生まれては消えていく。そのまま死語として人々の記憶から消滅してしまうものもあれば、時にはその形を変え再び命を吹き返すものもある。辞書とは、言葉の意味のみならず、その時代を写す鏡ともなる。</p> <p>しかし、辞書は一夜にして成らず。さまざまな人々の想いを乗せ、膨大な年月を懸けて産み出される。これは、辞書を造る人々の物語だ。</p> <p>言葉が変容していくように、人の心は動き続けている。不完全で、たまに立ち止まることもあれど、動くことを完全にはやめられない。時にその人の心は、周囲の人を突き動かす。変える。そうして、想いは受け継がれる。</p> <p>人の世の美しさとは、想いを受け継ぎ、永遠に紡がれていくところにある。</p> <p>この物語で、その片鱗を感じてみてはいかががだろうか。</p>
[4]	タテ社会の人間関係: 単一社会の理論	中根千枝	<p>この書を近くの図書館で手にした。ページの色褪せ具合から古いものだろうとは思っていた。しかし、日本がいに“タテ社会”であるかという著者の記述を辿っていくと、今の日本社会とさほど変わらないように感じて驚いた。そこで初めて出版年数を確認すると、現在から約55年前の本であることを知った……</p> <p>今や日本だけでなく世界的にグローバル化が進んでいる中で、日本の新しいシステムや価値観を受け入れることの遅さ、組織・集団でのしきたりや上下関係への拘りやなぜ変わらぬのか、普段の生活やニュースからもどかしく感じる経験は私だけではなない筈だ。このような点で、なぜ他国と違うのだろうかと疑問にしていたが、その理由がここにあった。いつも「日本は島国だから」と片づけていた私だが、社会構造まで深く掘っていき疑問が腑に落ちるのを実感した。またそのうえで、どうなれば社会が変化していくのか、追いながら想像することは面白い。</p>
[5]	JK、インドで常識ぶっ壊される	熊谷はるか	<p>日本の普通の女子高生が、突然インドに引越すことに。インターネットを使ってインドについて調べたものの、結局なにも分からないままインドでの生活が始まる。豊かな人が車を走らせる横で、1台のバイクに4人乗りする家族や、大使館のすぐ近くに広がるスラム街など格差社会での光と影を描く女子高生視点のインド滞在を記したこの作品。この作品は著者の実体験であり、著者と同年代の私にとっても読みやすい作品だった。インターネットだけで知るインドと、現地に降り立って知るインドは全く違うように感じた。安全な国で暮らす私たちが、宗教を信仰している人に対して、「宗教のせいで生活が制限されている」と思ったり、スラム街で暮らす子ども達に対して、「かわいそう」と感じたりする人は少なくないだろう。しかし実際はそんなことはなく、日本人の海外や外国人に対するマイクロアグレッションが、実際は偏見だったと気付かせてくれる作品だ。</p>
[6]	同志少女よ、敵を撃て	逢坂冬馬	<p>戦争が起きている。 2022年2月24日。今も終わりを見せない。私たちがコーヒーを片手に本を読んでいるこの時間。約8000キロ先には、銃を片手に母国を想い、戦っている人たちがいる。</p> <p>戦争とは。平和ばけという言葉が存在する時代になった今、この質問を出すことは容易ではない。戦争がもたらす「悲しみ」すら想像することのできない世代が、世の中で「平和」について日々議論している。</p> <p>銃を握ることなく生きている若き日本人が、今こそ見るべき情景、触れるべき言葉の数々は、まさにこの本の中のある。罪のない子供たちでさえ、吊し上げられ殺されるという現実。兵士たちの欲望のために、もはや道具と同等の扱いを受ける女性たち。人を殺し続けたことで、自分自身の精神までも殺された狙撃兵。</p> <p>暗く冷たい地を懸命に駆け抜けた、実在した女性狙撃兵にフォーカスを合わせたこの物語は、必ずや私たちの心に、戦争の「真の敵」の正体を語りかけるだろう。</p>

第6回 NUPS & NUAS 読書コメント大賞 (2022) ・ 一般投票

一番「いいね!」と思ったコメントを教えてください。
投票フォーム: <https://forms.gle/pe6GCnSPJRabGX829>

	書名	著者名	コメント
[7]	正欲	朝井リョウ	物語は月に似ていると思う。月が夜の暗闇を照らすように、物語も人が胸に秘めている孤独や秘密に焦点をあてるからだ。だからこそ、自分の内面を探りあてる物語に人は共感し、感動し、ときに恐怖さえおぼえる。言語化不可能だったものを、あっさりと言語化してしまうからだ。この『正欲』はまさに、秘密を明かさず息を殺して生きている人々に焦点をあて、我々が言語化を拒んだ真実を、言葉という槍で突きつけてくる物語だ。 美化された「多様性」という言葉がもつ恐ろしさを、現実味のある内容と、著者の圧倒的な想像力が余すことなく暴いていく。世界は全ての人が手を繋ぎ円になれるほど簡単にはできていない。そこで、あなたは試される。円の外側にいる想像もしてこなかった人たちを、あなたは「多様性」の一言で円の内側に招き入れることができるのか。言葉の槍は、あなたの心に深く突き刺さるだろう。私に刺さった槍は、まだ抜けていない。
[8]	水上旅日記: ミュンヘン-パリを歩いて	ヴェルナー・ヘルツォーク 著 ; 藤川芳朗 訳	「あのひとを死なせるわけにはいかない。ぼくが自分の足で歩いていけば助かるんだ」 ニュー・ジャーマン・シネマを代表するヘルツォークが恩師の重病の報せを受け、平癒を祈り、ミュンヘンからパリまでの700キロ、凍てつく大地を歩む。巡礼とも呼べる魂の彷徨は、全編を通して残酷であり美しい。生と死の匂いが嫌でも立ち込める。突き刺すような寒さと冷たい現実、ヘルツォークをもちや人ではなく、この世以外のものへと変えていく。薄れゆく自我が銀世界と溶け込んで1つになる。現実と空想の境界線がなくなった時、初めて美しい世界が目の前に現れる。過酷で無意味とも思える旅。彼にとって旅は目的ではなく、手段なのだ。燃え盛る胸の灯が恩師の元へと駆り立てる。からだのなかを、通り過ぎた、あるやさしいもの。私には見える。開いた窓の向こうに、彼が待ち侘びた永い永い巡礼の雪解けが。今こそ飛び立つのだろう。
[9]	十字架	重松清	親友。それは互いに心を許し合い自然体でいられる存在。私は親友と呼べる存在が欲しく、また誰かの親友になりたい。しかし、この作品における親友はそんな優しいものではなかった…。 クラスメイトのフジジュンはいじめを苦に自殺した。彼は幼馴染ではあったが、一緒に遊ぶことも話すこともない。「十字架」を背負った僕の20年間を描いた話。 彼を殺した加害者が背負う十字架、彼を見殺しにした僕が背負う十字架、彼の苦難に気づかないまま息子を失った両親が背負う十字架。それぞれが抱える十字架の重さに読んでいるこちらまで苦しくなる。しかし、この重苦しさは確と受け止めるべきものだ。 人の死の重さや残された者達に与える影響の大きさを感ずる一冊。家庭を持ち、母親の立場になってこれを読んだらまた違った感想になるかもしれない。
[10]	読書について : 他二篇	ショウベンハウエル 著 ; 斎藤忍 随訳	一読書とは、他人にものを考えてもらうことである。「読書」とは何かと思いつつも私にショウベンハウエルは語りかける。重く押し掛かるこの言葉に私はさらに悩んでしまった。一読書は思索の代用品にすぎないと、ショウベンハウエルはさらに私を痛罵する。なるほど私が「読書」だと思いついていたものは、ただの思索の放棄だったのか。 しかしどうだろう。もし「本を読む」という営みを止めてしまえば、書架に眠る彼らは誰かに読まれるのをいつまでも、いつまでも翹望することになるだろう。書架に死蔵され、悲しげな顔をした本が今も私の袖を引く。 私は今日もまた、頁をめくってしまう。たとえこの行為が思索の放棄だと言われようとも、私は本と共に鬱蒼とした言葉の森を歩んでいく。この歩みこそが私の「読書」なのだ。
[11]	店長がバカすぎて	早見和真	本と本屋のポップを見るのが好きだ。書店員が腕の見せ所だと言わんばかりに想いをぎゅうと凝縮させたあの数字が大好きだ。それは、本を売るプロが売り上げのためにというより、本が好きな一読者ができるだけ多くの人に届きますようにと願いを込めて書いていると信じているから。そんな一読者であり、本を売るプロである彼らの話。物語が本となり読者の手に届くまでのストーリー。多くの人が自分のことしか考えてないこの時代で、一瞬でも自分以外の人間を想像できるならそれだけで物語は有効だ。これから本の帯の書店員の名前をよく見てみよう。本文は作者から読者への、帯は本を愛おしむ読者が同じように本を愛おしむ読者へとへととしてでも届けたいメッセージだから。
[12]	白痴	坂口安吾	「死ぬ時は、こうして、二人一緒だよ。怖れるな。」甘く、ささやくような言葉は男女の恋物語ではない。戦況下、降り注ぐ焼夷弾から逃げる最中に男が白痴の女へ放った言葉である。軍国化されていく世間に失望し、芸術への情熱を失った男と、気遣いと結婚するも会話することすらままならない白痴の女が出会うとき、2人の不思議な関係性が動き出す。いつ命を落としてもおかしくない緊迫した状況で生きようとする彼らの行く末に目が離せない。作品の中では、敵国への批判が一切記されていない。だが、焼け焦げた死体や潰れた家と淡々と戦争が語られる文章はどこか冷静で、虚無感を覚える。また、坂口安吾は、戦争は性別や能力関係なく皆に平等な死を与える「巨大な愛情」だと表現し、私たちに戦争の新たな一面を教授する。彼ならではの視点で描き出される戦争は、今では当たり前となった平和の重要性を再確認するきっかけとなるに違いない。
[13]	破船	吉村昭	わたしの胃と心は、凍えてしまった。 海と山に閉鎖された貧しい村。そこで生きる九歳の少年は、貧しさと責任の荒波に揉まれていた。父と交わした妹を飢えさせない約束を守るため漁に励むも、獲れるのはほんの僅か。漁業で生活を成り立たせる村には、おぞましい秘密が隠されていた。船を難破させ、水主を殺し、積み荷を奪うことだ。やがて少年もこの儀式に参加する。家族のため、必死に役目を果たそうとするも、努力は泡となった。死の腐敗臭に満ちた船が流れ着き、村は疫病という地獄の水底へ沈んでいく。 生きていくためには仕方のないことだったのだろうか？ 餓死が身近だった昔。飢えから来る恐怖は、人を狂気に駆り立てる恐ろしい病だったのかもしれない。 わたしたちは毎日豊かな食事ができることを、噛みしめて、感謝しなければならない。読み終えた日の夜、夕飯で口にしたお米は、いつもより甘く感じた。悲しみに凍てついた胃と心に、じんわりと染みて…。

第6回 NUFS & NUAS 読書コメント大賞（2022）・一般投票

一番「いいね！」と思ったコメントを教えてください。

投票フォーム：<https://forms.gle/pe6GcNspJRabGXb29>

	書名	著者名	コメント
【14】	夜行観覧車	湊かなえ	<p>私はSNSが嫌いだ。みんな幸せそうで全員の人生がうまく行っているように見える。しかし冷静に考えてみればそんなことはありません。誰もが華々しい一面を持つ一方で何かしらの地獄を抱えている。そしてその地獄はなかなか外からは見えにくいものだ。</p> <p>とあるエリート一家で殺人事件が起こった。被害者は父親、加害者は母親であった。誰もが羨み憧れる一家から一転、子ども達は近所から後ろ指をさされ、友達とも距離ができ、ネットで誹謗中傷を浴びる。側から見れば完璧な一家の中で、一体何が起こっていたのか。</p> <p>この話は読み進めるにつれそれぞれの抱えていた「地獄」が見えてくる。人の地獄は見えにくく、本人にはわからないものである。たとえどんなに幸せそうに見える人でも皆どこかで苦勞して帳尻を合せているのだ。綺麗な部分のみが可視化された現代。そんな現代を生きる我々に必要なのは見えない「地獄」を補う想像力かもしれない。</p>
【15】	生まれた時からアルデンテ	平野紗季子	<p>スマホをみながら食べた晩ご飯。味の感想より動画の内容を覚えている。</p> <p>そんな私と対極にいるのがフードエッセイストの平野紗季子さんだ。幼少期から「食日記」を綴る平野さんの文章を読めば彼女の食事に対する等身大の愛と敬意を感じずにはいられない。大好きな「食」を全力で楽しんでいる彼女の姿がありありと浮かんでくる。文章から食べ物の匂い、音、色、周りの景色までも見えてくる。食べ物が好きだからこそ生まれた言葉、でもその気持ちわかる！そんな「美味しい」文章が魅力的だ。彼女から食事の傍さ、大切さを教えてもらった。時間に追われる私たちは楽しいはずの食事の席から離れてしまっていたのかもかもしれない。「食事」と「言葉」と「あなた」を素直なテーブルに案内し直してくれるのがこの本。</p> <p>どうやら平野さんの言葉で私の心のレストランは満席になってしまったようだ。</p> <p>すみません、本日の食事にスマホ用のお席はご用意できませんでした。</p>
【16】	三島由紀夫レター教室	三島由紀夫	<p>あなたには文通の経験があるだろうか。</p> <p>この物語は、年齢も境遇も異なる5人の登場人物たちによる手紙のやり取りのみで語られる書簡体小説である。手紙というものは、そこに紡がれた言葉以上に書き手の心を映し出す。欲が見え見えの手紙から実直なラブレター、下心を隠したお誘い、あるいは素直じゃない大人のやり取りまで。</p> <p>本作は5人のやり取りを俯瞰的に見ることで、関係性や手紙の外での出来事まで読者に想起させる。最後に著者である三島由紀夫からの手紙が添えられている。そこには、感情に訴える手紙が一番難しいとある。</p> <p>現代社会を生きる我々は、SNSやメールを用いて、即時に短い文章のやり取りをすることに慣れている。しかし、あえて皆様も一度筆を執って、文字で気持ちを伝えてみてはどうだろうか。なぜならば、本作を通じて5人の気持ちに触れることで、きっと誰かと手紙のやり取りをしたくなるからだ。</p>
【17】	戦争は女の顔をしていない	スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ [著] ; 三浦みどり訳	<p>全く別の世界に来たような感覚であった。</p> <p>敵の命を奪うことを誰も全く疑わない。それが良い事とされる。死と隣り合わせの世界では、人間は別の生き物に変わってしまうようだ。それが「戦争の顔」なのだろう。</p> <p>本書には戦争の後も女性達が「母」という女性の顔を取り戻すことが出来ずに苦しむ様子が描かれる。彼女らは自らの失った「命を育む顔」を取り戻そうと藻掻いた。戦争によって張り付けられた「命を奪う顔」をどうにか引き剥がそうと苦しんでいたのだ。</p> <p>私自身の体験になるが、授業で今日のウクライナの話になった際、ロシア語の先生が泣いていたことが印象深い。どんなに辛いだろうか、家族の出身国が戦争の当事者になってしまうのは、世界情勢が混乱している現在、日本に生きる我々もこの戦争のリアルに目を向けるべきと考える。ニュースの向こう側に思いを馳せるのである。戦争は女の顔をしていない、しかし戦争に傷つき涙を流すのはいつも女の顔だ。</p>
【18】	ライプニッツの創世記：自発と依存の形而上学	根無一信	<p>なんとなくのイメージから敬遠されがちな学問、哲学。しかし、そんなイメージを打ち壊してくれた人物こそ根無先生。授業を受講して先生の著書であるこの本に出会った。ライプニッツの一見すると矛盾する二つの説について記されているのがこの本だ。実際は矛盾どころか、「ライプニッツ哲学の深さと豊かさの証拠である」ということがわかる。予備知識のない私が理解できるか不安であったがわかりやすい言葉遣いとアナロジーに救われた。半分ほど読み終わったときにはもうライプニッツ、いや根無先生に夢中になっている。なぜここまで魅力的な本が完成したのだろうか？その答えはあとがきに記してあった。根無先生の人生の一端を知ることができる文章からこの本に対する想いを見つけた。読んで終わりの本ではなくあなたに「介入しない介入」をする本だ。矛盾している？矛盾していないと証明するには余白が足りない。代わりにこの本をおすすめする。</p>
【19】	水上バス浅草行き	岡本真帆	<p>5・7・5・7・7の31音で表現できる世界がある。収録されたひとつひとつの短歌に繋がりは無い。けれど、作者の世界を垣間見ることが出来る。例えば、「外に降る雪の様子はみてるからあなたは鍋の様子をみてて」という歌。ぐつぐつと煮える鍋の音が聞こえてこないだろうか。しんと雪の降る窓の外の冷たさと、それを横目に話す暖かな温度が。擲揄うような響きと、それに不平を唱える「あなた」の声、思い浮かばないだろうか。</p> <p>余白があるから、物語がある。自分なら何気なく流してしまう風景を、そっと掬い取って丁寧にアルバムに切りとることのできる人がいる。たった31音。されど31音。いつもの風景を少しだけ色鮮やかに変えてくれる、そんな本だ。</p>